もともと自立心の強い子供だった。甘えん坊の姉と優しくて気弱な弟にはさまれて、できることはなんでもひとりでしたがった。

「有希は本当に何にもしてあげなくて大丈夫だね」

そう言われるのが、有希にとってはいちばんのほめ言葉だった。

ひとり遊びも得意だった有希は、いろんなものに絵を描いた。家族の顔、動物、空、

海、遊び場……。その構図や色づかいは、普通の子供とは違っていた。

ひそかにわが子の才能に気づいていた猛は、有希を絵の教室に通わせることにした。

習字の塾はうまくいかなかったが、絵なら大丈夫かもしれない。子供たちが好きなことはなんでもひととおりさせてやりたい。その中で本当に得意なものを十分に伸ばしてやりたい。そう思っていた猛は、教育には出費を惜しまなかった。

実際絵を描くのが大好き有希は喜んで教室に出かけていった。

ところが、教室から帰ってきた有希は、道具を置くなり「やめる」と言いだした。みんなと一緒に絵筆を洗い、みんなと同じ題材をみんなと同じ時間をかけて描くのが、気に入らなかったのである。先生に「空と建物を描きましょう」と言われても描く気になれなかった有希は、全然違うものを描いて先生に叱られた。

結局2、3回通っただけで絵の教室はやめてしまった。猛は、わが子の我の強さに多少の不安を覚えながらも「好きにさせよう」と大目にみることにした。

小学校2年のとき、姉と一緒に歌とピアノを習いはじめた。手の小さい有希はピアノはどうも苦手だったが、歌の時間は楽しかった。姉とふたりでハモったりすると、不思議な心地よさが体中に広がっていくのを感じた。

姉とふたりで仲良く音楽教室に通う有希の姿を見て、猛はこのまま続いてくれることをひそかに願っていた。

はじめての発表会がやってきた。函館市民会館の大ホール。客席は家族や親戚など関係者ばかりでガラガラだったが、母のお手製のドレスを着て、有希は得意だった。緊張感はまるでなかった。みんなの前で歌える。それだけで胸がわくわくしていた。

最初は姉とのピアノの連弾だった。「きらきらぼし」を並んで弾いた。決してうまくは弾けなかったが、なんだかみんなが耳をすませて聞いてくれているのがうれしかった。まるでテレビの中にいるようだ。有希はひとり興奮していた。

客席でカセットテープを回しながら見ていた猛と亮子は、娘たちの演奏が無事終わったのを確認して、ほっとため息をついた。

ひととおりピアノの演奏が終わり、いよいよ歌の発表に入った。有希の歌は「つりかわさん」。ステージの真ん中に立ちお腹から声を出しながら、有希ははじめての気持ち良さを味わっていた。客席を見下ろしながら、1曲を歌い終わったとき、有希は両手を胸の前でしっかりと組んでいた。まるでオペラ歌手のように。

「いいぞ、有希!」

そのとき、猛が思わず声を上げて失笑を買ったのも、有希の耳には届かなかった。

「よしっ」

なんともいえない満足感に浸りながら、まばらな拍手の中、有希は深々とお辞儀をしてステージを去った。

録音したカセットテープを握りしめて、猛は興奮していた。わが子の歌は予想以上にうまかった。猛は歌を習わせたことに満足していた。

が、その2年後、有希は歌もやめてしまった。ピアノがうまく弾けないという理由で、一緒に習っていた歌までやめてしまったのである。なんでも一番にならないと気がすまない娘の将来を案じる亮子に、

「そういう子のほうが結局は伸びるんだ」

と自分に言い聞かせるように猛は言った。

十数年後、有希が同じステージに立ち、超満員の観客に拍手で迎えられることを、当時、ふたりはもちろん知るはずもなかった。